Tが行く！⑤
～戦後70年～

8月15日で、日中戦争から続いた戦争（昭和12年～20年）が終結して70年を迎えます。

戦争は松田町から出征された方々はもちろん、町に残った方々にも影響を及ぼしました。今回は戦後70年を迎えるにあたり、当時の町での生活にスポットライトをあてて、学生だった方、お住まいだった方、疎開されていた方にお話を伺いました。

【問い合わせ】政策推進課 経営戦略係　☎(83)1222

戦時中高校生だった80代の松田在住の男性の話

深刻な物不足

当時、生活用品は国から配給される切符と交換して手に入れていましたが、切符を持っていても、その品物がなく、なかなか、交換することができませんでした。特に履く物がなく、品物の調達には非常に難儀していました。

男性は、学生でありながら、勉学だけではなく、勤労奉仕という、無償での勤労を課せられていました。男性の勤労は農作業で、戦争末期には、一週間のうち学校へ登校する日は1日だけでした。

農作業では、衣類の消耗が激しかったそうです。これは、農作業という肉体労働に加え、配給品の衣類は、粗悪品が多く、十分な強度を保てていなかったことも原因でした。ただでさえ手に入りにくかった衣類が、どんどんすり減っていったようです。当時、男性は自分の両親がどうやって、衣類を工面していたかは、覚えていないようでしたが、両親は、何とか衣類を用意していたとのことでした。

学生による勤労奉仕

グラウンド下を耕作する児童
松田国民学校

植林作業に出かける児童
寄国民学校

頭上の米軍機

戦争も末期となると米軍機による日本本土への空襲が激化してきます。

日本へ空襲を行う際、サイパン島などにある基地から飛び立った米軍機は、富士山を目指し北上します。そして東京や横浜、横須賀、平塚を目指すために、東へ進路を変えます。その時、県内を空襲する米軍機は松田上空を飛んでいったようです。

恐怖の1時間

その日は男性が、学校に登校する日でした。学校に着くと空襲警報が鳴り、急いで学校内にあった防空壕へ避難しました。狭い防空壕へ2～300人の生徒が避難し、防空壕の中は非常に暑かったそうです。上空を見上げると、米軍機が何百機も飛行し、全機が通過するには1時間ほどかかったようでしたが、日本から迎撃のための戦闘機は一機も出撃しなかったようです。男性は「打たれっぱなしのボクサーのように何もできなかった」と述懐していました。

戦時中、松田町に疎開した女性（81歳・南足柄市在住）の話

当時、小学生だった女性は東京に住んでいましたが空襲が多くなり千葉へ疎開していました。その際、姉と弟は疎開の対象となっていなかったため家族とともに東京に残っていました。しかし、昭和19年頃、空襲で東京の家を失ってしまい、母方の本家がある松田町に東京の家族が行くことになったため、女性も松田町に来ました。現在の庶子あたりに住んでいたそうです。家がなかったので、本家の倉庫を改造し住んでいました。

戦後間もない頃の松田町

疎開してきた人は、米ではなく麦を食べていました。配給もありましたが、畑でジャガイモやカボチャなどを作り、食料を確保していました。女性は、当時小学生だったので、勤労奉仕はしていませんでしたが、畑仕事を手伝っていたそうです。畑は山のほうにあり、片道約1時間かけて行っていました。カボチャは今と違いおいしいものではなく、まずいと思いながらも貴重な食料として食べていました。

親しくなった農家の方に食料を分けてもらったり、田植えや稲刈り、雑草むしりの手伝いをしたりして、お金や物を得ることもありました。

また、当時は銀行にお金を預けてあっても、金融封鎖があり一定の金額しか下ろせない状況になっていました。いくらまでかは覚えていないそうですが、かなり少ない額だったので、預金があってもお金がない状態でした。

夜は、空襲の警報がなるとすぐに明かりを消します。そうしないと空襲されてしまうためです。明かりを消すとすぐに近くの畑まで逃げました。近所の家も同じように明かりを消すため真っ暗な中、畑の方へ逃げます。ある時は、機銃掃射で近くの家が撃たれたこともあったそうです。

戦時中、寄村にて生活をしていた安藤壽々子（あんどうすずこ）さん（92歳・萱沼自治会）の話

戦時中の生活

寄村にある壽々子さんの家は農家でした。その当時、農家は、決められた量の農産物は供出をしても、あまった農産物などは家で消費することができました。そのため、戦時中は、衣料などの物品はなかったようですが、あまり食料に困ったという記憶はなかったようです。また、当時の日本では食糧不足から、余った食料などを村外の人たちと物々交換を行うといったことが全国的にあったようですが、それをすると買った人はもちろん、売った人も厳しく罰せられたため、ご近所ではそういったことはなかったそうです。

壽々子さんの家では、陸稲と呼ばれる畑で栽培できる稲やダイコン、ニンジンといった野菜のほか、カイコやタバコ(萱沼のタバコは当時名産品でした。しかし、戦後、昭和25年の火事でタバコの苗は、全滅してしまいました)なども育てていました。

ご主人の昇（のぼる）さん（写真右）と壽々子さん。ご主人は戦時中、満州やベトナムへ出征していました

物資不足

戦争初期、壽々子さんは、川崎の軍事工場に住み込みで働いていました。その当時は戦争が激化する前でしたので、川崎での空襲を受けた経験はなかったそうです。川崎で生活をしていたのは約半年間で、その後は、寄村に戻ってきて、ご両親と農作業をしていました。壽々子さんには2人のお兄さんがいましたが、2人は仕事や出征で家にいなかったので、農作業は主に壽々子さんの仕事だったようです。萱沼の自宅から中津川まで障子を担いで洗いに行ったり、広大な農地を耕作したりと、かなりの重労働をこなしていました。農作業では衣類がほころびますが、衣類は不足していたので、着物を繕い直したり、バラして他の繕いに利用したりと、工夫して使っていたそうです。

また、戦争が長引くと、国の物資不足も深刻となり、鉄製の流し台などを供出品として、国に出すこともありました。

足柄上郡の国民学校から二宮金次郎像（写真中央上段）を供出する際の写真

町からのお知らせ

松田町では、戦後70年を迎えるに当たり、戦没者、原爆死没者の冥福と世界の恒久平和を祈念し、下記の日時にサイレンを吹鳴しますので、黙とうをささげましょう。

- **広島原爆死没者への慰霊　8月6日(木)　午前8時15分**
- **長崎原爆死没者への慰霊　8月9日(日)　午前11時2分**
- **戦没者への慰霊(終戦の日)　8月15日(土)　正午**